

ギアナ高地・エンジェルフォール

アルパインツアー

2014年11月28日 ～ 12月5日



パライテプイからのテーブルマウンテンの一つのロライマ山

テーブルマウンテンが100個以上もあちこちにそそり立つベネズエラのギアナ高地へ行って来た。地球の裏側へ行くわけであるから、行くまでが大変である。まずアメリカのダラスへ12時間以上かけて飛び、更にマイアミまで4時間かけて移動する。ここで一泊した後



ベネズエラの首都カラカスへ行く。この4時間が短く感じるようになってしまったのであるから、人間の適応力はたいしたものだ。メンバーは男2人に女4人、それにアルパインツアーの春木さんとベネズエラ人ガイドのフェリックスが付いて、合計8人である。

ベネズエラへの入国でさっそくトラブルである。入国審査は通ったはずであるのに、変な所へ連れて行かれる。同じ飛行機で入国した西遊旅行の 8 人くらいの日本人グループもそこにいる。彼らのベネズエラ人ガイドが間に入ってくれて、どうやらワイロを要求されているらしいことが分かった。そのうちに我々のベネズエラ人ガイドも来て、1 時間半くらい待たされた後、要求に従って金を払うことでやっと入国となった。後で聞いたところ、“お前らは持ち込んではいけないものを持っているから罰金を払え”と言われて 50 ドル払ったようである。しかし誰も荷物チェックなど受けていない。もしここで正論で臨んだらば、入国は翌日になったかもしれない。ホンジュラスに次いで世界で 2 番目に治安の悪いという情報もあり首都カラカス市内からは全く離れた飛行場近くのホテルへ泊まったが、何ともヘンテコリンな国へ来てしまった。

もう一つ空港で驚かされたのは、ベネズエラ女性のバストの大きさである。とにかくデカイ。ここでは F カップなんてペチャパイと評されるであろう。ただしおなかの方も自己主張している人が多い。そうでない場合はお尻が巨大である。なぜかおなかとお尻の両方がデッパテいることはない。

ベネズエラでの初日は、さらに国内の飛



カラカス飛行場



ユルアニ滝



パライテピイのロッジ

行機を乗り継いで、カマ滝とユルアニ滝の見学を経て、ロライマ山の登山基地になるパライテピイのロッジに着く。けっこう立派な施設である。しかしこの夜に泊まるのは我々のグループだけみたいである。

私の同室は静岡県から来た葵さん。若いころは北岳のバットレス（胸壁）のロッククライミングをやったり、雪の南アルプスなどで馴らしたらしい。しかし婚約を機に命にかかわるようなことから足洗って、父親の事業を受け継いで印刷会社の経営に専念したようである。息子さんには、単語はすべて英語で教えるというような教育をしたらしい。そのおかげかどうか、今は息子さんは大学で英語関係のことを教える教授になっているとの

こと。それが関連するかどうかはわからないが、印刷業は葵さんの代でたたんで、世界の山登りに復帰したようである。アルパインツアーの春木さんの話では、私よりもアルパインツアーへの貢献は多いようである。私の場合は18年くらいかけての実績であるが、葵さんはその半分以下の年数での実績であろう。写真が趣味で3連射の1眼レフを持参して、行動中でも先に行ってカシャカシャカシャと撮りまくる。普段はカワセミ専門で写真を撮っているという。何事にも徹底する性格みたいだ。細かいことにはこだわらず、暇なときにはただひたすらいくらでも寝ている。同室者としては気を使うことがなくありがたい。

パライテプイのロッジの一夜は結構寒かった。透けて見えるようなペラペラの毛布が1枚与えられただけでかろうじて2重に折って寝て寒さを凌いだ。

今回の我々のロライマ山攻略方法は、上りはヘリコプターで下りは歩くというやり方である。上り下りとも、ヘリコプターとかあるいは歩くというバリエーションがある。



ヘリコプター登頂



ヘリコプターから見るロライマ山の壁



ヘリコプターから見るロライマ山山頂の湿原

ヘリコプターはわずか10分で我々を山頂へ導いてくれる。立ちのぼるロライマ山の壁を乗り越えられるのかなあ、という心配なんか何する物ぞと頂上へ運んでくれた。だっ広く広がる山頂湿原と奇怪な形の岩の群れは我々を驚かすのに十分である。山頂は思いもよらぬ湿原の世界である。ただし尾瀬などとは全く違うタイプの湿原の世界でもある。



シャーロックホームズで有名なコナン・ドイルが「失われた世界 (ロストワールド)」でSFものとしてこの地を紹介しているようであるが、スピルバーグの映画「ジュラシックパーク」でも同じようなキャラクターの物語として紹介されている。まあ確かに恐竜でも出てきそうな景色ではある。

ベネズエラのこの地がこんな地形になったのは、6億年前には世界の大陸はゴンドワナ大陸という一つのものであったという。これが現在のようなアメリカ大陸やユーラシア大陸

のような形になるときに、回転運動をしながら分裂していった。このときの回転軸に当たる地域がこのギアナ高地であった。この地域は軸の中心であるから回転運動による影響を受けることなく、原初のままの地形を保つことができたということである。年間 4000 mm 降るといふ雨がこのような湿地帯構成の元になっている。12 月～4 月は乾季であるので、われわれ観光客を受け入れることができる。ベネズエラ人ガイドのフェリックスがこのような説明をしてくれたわけであるが、私が彼の英語を理解できたわけではない。今回は、特に女性群の中に英語を苦にしない人が多く、彼女らがウンウンとうなずくと、フェリックスは春木さんの通訳を待たずにどんどん話を進めてしまう。ここに書いた内容は本文を仕上げるためにインターネットで調べ



山頂の奇岩



岩陰のテント場



湿原と奇岩

直したものである。フェリックスの配下としては7・8人のポーターがサポートしてくれており、岩陰のテント場を確保してくれたり、食事の準備などをしてくれた。このテントはえらく寒かった。なんと、フライシートの下の本体はメッシュである。これでは寒い。ところが私は防寒具をほとんど持っていなかった。赤道近くに行くのにそんなに寒いわけではないよ、と考えていた。ポーターに預ける荷物は7.5 kg以下と制限をかけられていたために、持っていたセーターもカラカスのホテルに置いてきてしまった。装備リストには“セーターまたはフリース”とあったが、汗だくになることを想定してTシャツの着替えばかり持ってきてしまった。“まあ、雨具があれば防寒具にもなるよ”と高をくくっていたら、ロライマ山の2日目に雨が降ってしまった。それでもテントがメッシュでなければなんとかなったはずであるが、根性で着たまま乾かした。

ポーターにも風邪をひく人が出てきて、春木さんが“どなたか薬持っていますか”と聞きに来た。札幌から来た中央さんが、症状を聞きながら“薬には慣れていないだろうから、抗生物質は軽めにしておいたほうが良いね”などと言いながら、てきぱきと“これとこれ、朝何錠、昼何錠”などと指示している。どうやら女医さんらしい。英語も一番達者だ。ドクターXの大門美智子は弟子だったりして。“ワタシ、失敗しないので”なんて。身長も170 cm以上ありそうだ。尊敬しちゃうなあ。国内での山登り経験はほとんどないようであるが、アルパインとは外国旅行というキーワードで結びついているようだ。

兵庫県の川西さんも自他ともに認める才女である。ご主人とはすべて対等で、お互いに手が空いている方が家事でもなんでも受け持つようにするそうである。還暦はとっくに過ぎていると思うが、現在も仕事は現役なのかもしれない。仕事もかなりの実績を持つよう



で、もし彼女の部下になったとしたら疲れるだろうな。とにかくその吸収意欲は半端じゃない。英語はわからないもう一人のガイドのカルロスにスペイン語ではどう言うのかなどと聞きまくっている。もちろん英語はペラペラ。

甲府の住吉さんの名は“みどり”スペイン語で緑は“ヴェルデ”と言うことだ。陽気なフェリックスがこれをすっかり気に入ってやたらヴェルデ、ヴェルデと声をかける。乗りのいい住吉さんもニコニコしながら答えるから話も弾む。家でもいつもご主人からからかわれて、家でもこれとおなじなんですよ、と言う。ご主人と二人で宝石店を営んでいるという。このロライマ高地には水晶がゴロゴロしている。山梨県もかつては水晶が採れたところであるので、両手ですくって“全部で1円にもならないね”なんて言っている。海外登山経験も多そうで、そのためのジム通いも欠かさないようだ。“昔は乙女、今は太め”というTVコマーシャルがあるが、“私は昔から太かったよ”とニコニコしながら言う。

キャリア官僚をご主人に持つ大阪の茨木さんは、蝶よ花よと育てられて何の苦勞も知らないで大人になって幸せな結婚をして、息子と娘もちゃんと独立をして、名実ともにおばあちゃんになったような人である。東京に何年、大分に何年と転勤を繰り返したらしい。おそらくその度にご主人は要職に登って行ったのであろう。今では東京に単身赴任の御主人の面倒を見るために月2回の割で上京しているようである。犬だとか小鳥だとかを見ると、なんでも“この子は〜”と話しかける。なんでもこの子にしてしまう。そんな風情がちっとも嫌味にならない。自然とついたあだ名が“お公家さん”である。そう呼ばれても嫌な顔もしない。やはりお公家さんだ。そんなお公家さんがかなり世界の山登りをこなしている。マチュピチュやパタゴニアにキリマンジャロなど私が行った世界の山はほとんどこなしている。山の名前を言うと“あ、それは行きました”という答えが返ってくる。

アルパインのツアーリーダーの春木さんは32歳と若い、いろいろな経験の持ち主だ。ニュージーランドで観光ガイドをしたり、鎌倉で人力車をしたり、雪上車のインストラクターもしたり、そして今はアルパインのツアーリーダーであるが、この仕事がないときにはその他にもいろいろやっているようである。アルパインではヨーロッパの山のガイドをすることが多いという。世界の山歩きをする人はジジババが多いので、若いけれどもジジババの扱いは苦にしていけないようだ。

トイレの処理方法の考え方にもいろいろあるようだ。日本の山小屋ではバイオ処理が普通になってきているが、ここでは持ち帰りである。小はどうでもいい、大はビニール袋に入れて石灰の粉だかを混ぜて、さらにそれを入れる大きな袋の中に入れておけという指示である。おそらくポーターが持ち帰ったのであろう。生態系を守るためには余計なものは置いていくなという考えみだ。



トイレテント



ロライマ山の山頂には、湿原もあるが、滝だとか洞窟などもある。この地域はおそらく岩を中心に構成されているので、水はけは悪く、乾季の終わりころにはこのような水はすっかりなくなってしまいのではないだろうか。これは私の推測であって、当たっているかどうかは知らない。

ギニア高地に対して、ここに来るまで私は何の知識も持っていなかった。何かの映像で見たものが記憶に残っていたのだと思うが、山頂にも部落があって人が住んでいるものであると思っていたくらいであるからひどいもんだ。いままでたくさんの未開の辺境の地を見てきたが、ここで見た景色は他にないものである。コナン・ドイルがロスト・ワールドと自身の小説の題名に名付けたのも理解できるような気がする。



ロライマ山の上で 2 日間過ごした後、ヘリコプターで 10 分で登ったところを 3 日間かけて降る。といったところでテントや食料はもちろんのこと、寝袋及び私物の重たいものはすべてポーターに運んでもらう。

テーブルマウンテンの横壁を降りることになる。パライテプイのヘリコプターに乗るところから見たときには傾斜 45 度の坂道を降らされるものと思って



ポーターの荷運び



テーブルマウンテンの横壁と 45 度の降り

いたが、実際に降りてみるとそれほど急角度ではなかった。しかしこの垂直の壁はすごいよなあ。ロックをやるやつはこんな所も登りたいのであろうが、岩が柔らかそうなのでちょっと無理だろうな。

ロライマ山ベースキャンプに泊まる。ここまで降りると暖くなる。

写真で示せないことが残念であるが、夜の空一面の星空の美しさは何とも言えない。10 時半くらい

に小便にテント外に出ると一面の星と月である。明け方の 4 時くらいに尿意ももよおさな



ロライマ山ベースキャンプ

いのにあえて外へ出る。“当たり”だ。今度は月がないので見事な星空である。ゆつたりと天の川も流れている。“おー、milky way!” なぜか英語が出る。

降り道の 2 日目・3 日目となると徐々にロライマ山は遠くになって行く。そして赤道近くの強烈な日射が攻撃を仕掛けてく

る。日焼け止めクリームなんて日ごろ使いなれないものを急に擦り込んだって慣れないものはどうしようもない。首筋なんて塗り忘れると、すぐにひりひりしてくる。途中で沢を渡るようなところがある。装備リストには“ベルト付サンダルまたは溪流シューズ”なんて書いてあったので、大枚 8000 円支出して溪流シューズを持っていったら、そんな大げさなことをしていたのは俺だけであった。だいたい 500 円のサンダルと 8000 円の溪流シューズをまたはで結

ぶ方がおかしい。フェリックスは“ソックスで歩いても良いよ”と言っていた。後で、川に水浴びに行ったときに裸足で川に入ったら、苔で滑ってしまう。ソックスで歩けばこれを防ぐことができる。なんだ、それだけで良かったのかよ。

8000 円、居酒屋 3 回分だ。



ベネズエラの第2弾はエンジェルフォールである。標高差が 979m あり、世界 1 といわれる。たまたま発見したのが、アメリカ人の探検飛行家であるジミー・エンジェルという人であったのでその名前が付いたということで、期待するようなロマンティックな意味はない。

まず、ギアナ高地の基地からエンジェルフォールの基地であるカナイマへ移るために乗る飛行機からエンジェルフォールを見ることが出来る。この飛行機はチャーター機であったので、雲の中に隠れようとするエンジェルフォールが見えるまで何とか見せてやろうとするサービスをしていていたようだ。綿をちりばめたような雲を眺めることも楽しい。そしてわずかであるが雲の間にエンジェルフォールをチラッと見ることができた。この時点ではどこまで近付いてみる事が出来るのかは想像がついていない。



飛行機からのエンジェルフォール

エンジェルフォールへは基地となるロッジがあるカナイマからスタートする。交通機関は小さなエンジン付きボートによるクルーズということになる。目的地のラトンまでは4時間かかる。2005年にカムチャッカのアバチャ山へ行ったときに、ゴムボートによるクルージングなるものを経験したことがあるが、あれはほんのお遊びだった。しかし今回は小さな木製くりぬきエンジン付きボートで4時間のクルージングである。船のへさきが掻き揚げる波しぶきがもろに降りかかる。その波しぶきに虹がかかることもある。すんなり進むところばかりではない。浅瀬にかかると船を降りて岩ずたいに歩かなければいけないときもある。それでも今回は恵まれていたらしく、腰まで水につかって船を押すようなことまではなくて良かった。そのうちエンジェルフォールが見えてきた。



エンジン付きボート



ボートの波しぶき



ボートからのエンジェルフォール



浅瀬の沢歩



979m あるエンジェルフォールはさすがに大きく、上昇気流で滝の水が下まで届く前に巻上げられてしまうために滝壺というものがない。

ボートを降りたところからエンジェルフォールまではさらに 1 時間半くらい歩かなければならない。4 時間以上のクルージングをこなした後の歩行はケッコウ効いた。

この日の宿泊は大部屋のハンモックと案内書には書かれてあったが、トタン屋根があるだけであるので、これが部屋といえるのかい、といった感じであった。ハンモックで一晩寝るなんて初めての経験であったが、それなりにちゃんと寝ることはできた。



エンジェルフォールで全員集合



ハンモックの寝室



カナイマのロッジ

ベネズエラという国は、石油輸出として潤っているためか、私がかつて訪れたどの国よりも観光での商売ということに対して熱心でない。ギアナ高地ではプライテプイのロッジへの入り口の食堂兼土産物屋にわずかな店があっただけであり、エンジェルフォールではカナイマにわずかに土産物屋があるだけであった。カナイマの土産物屋なんか、何か聞いても仲間同士のおしゃべりの方に夢中で応対もしてくれなかった。ヒマラヤやキリマンジャロで、どこまでもしつこくついてくる観光地の土産物屋とはまるで違う。これがネパールであったら、エンジェルフォールにだって土産物屋ができていることであろう。